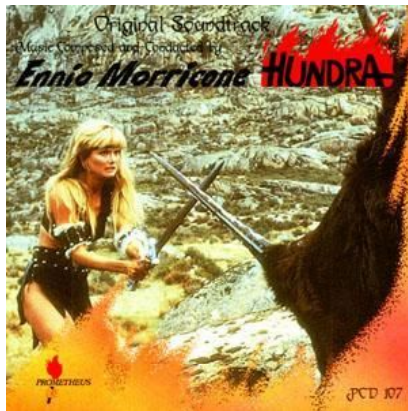


ハンデド HUNDRA

1983年アメリカ・スペイン合作映画
監督|| マット・シンバー
出演|| ローレン・ランドン/
 マリア・カサル/ジョン・ガフアーリ/
 ルイス・ロレンツォ/
 クリステイナ・トーレス



さて『ハンドラ』です。金蹴りファンには伝説の名作。十数年前、テレビの深夜放送で見て、ショックを覚えた人も多いのではないのでしょうか。

この映画は、いわゆるアマゾネスものに分類されます。アマゾネス映画は、低予算女性アクションの一ジャンルを築いているのですが、その理由はひとつ、コストが安いというお馴染みの理由です。セットも、どっかの荒地地に掘って建て小屋を作ればすむわけですし、ローマ史劇の伝統のあるアメリカやイタリアでは、コスチュームはいくらでも安くレンタルできる。

日本で古代もののドラマを作ろうとすると、そういうジャンルの作品が少ないだけに、衣装をいちいち新調せねばならず制作費が高騰するのですが（先日NHKで放映された『聖徳太子』では、エキストラの衣装代がかさみ、演出家が左遷されたそうです）、その点、『十戒』や『ベン・ハー』といった大作で作りつけてきた国は違いますね。

それに、古代アマゾネスものは、なんといっても露出度が高い。拳銃なんて野暮なものがないから、剣か素手での格闘シーンが多く、女優に金蹴りをさせやすい条件が揃っている。なんともうらやましい環境です。

そんでもって『ハンドラ』です。

堂々たる典型的なB級アマゾネス映画です。訝しいのは、初期のマカロニ・ウェスタンや『ニュー・シネマ・パラダイス』などで数々の美しい映画音楽作曲したエンニオ・モリコーネが、音楽を担当していること（この人だけが、スタッフ、キャストを通じてA級）、どういう経緯だったのか知りたいところだけど、当然、モニコーネのビオグラフィからは削除されているでしょうね。

幼いころ、野蛮な王に一族を虐殺された女剣士ハンドラが、成長して復讐に乗り出す話です。まず、一族を襲った連中を一人で襲撃して全滅させる。あっけなく、復讐をとげてしまうのですが、ここでさっそく金蹴りシーンがあるので、まあいいとしましょう。

さて、そのハンドラが空腹でさまよっているうちに、とある洞窟に迷い込む。一人の大男が飯を食ってる。ハンドラは飯を分けてもらいたい一心で大男に不器用に媚を売る。大男がサデイストで、鞭を振り回してハンドラをいたぶる。ついに堪忍袋の緒が切れたハンドラ、いきなり大男の睾丸をぎゅっと握りしめる。苦痛に絶叫する大男。ハンドラは怪力を発揮して大男の睾丸をつかんだまま放り投げ、あとは殴る蹴るわの狼藉。

ハンドラを演じるローレン・ランドン、『カリフォルニア・ドールズ』で女子プロレスラーを演じただけあって、格闘はお手のもの（残念なことに、日本で発売されたビデオでは、このシー

ンがばっさりカット。暴挙！)。必要以上の暴力がこたえられません。

さて、そのハンドラ、とある都市にたどり着きます。段落が変わる度に「さて」ばっかりですが、ほんとに細切れみたいなシーンの羅列が冒頭延々と続くんだから仕方ない。

その都市は、完全な男性優位社会で、女性は奴隷のように扱われている。これに憤ったハンドラ（このへんから、物語の展開は妙にフェミニスティックになります）、神殿で野卑な男どもに奉仕する巫女トラキマに「女だからって、男のいうなりに体を開いてはだめ！ 戦わなきゃ」と説得。さっそく、彼女に特訓をほどこします。その特訓というのが、相手にさとられずに、股間を蹴ること。稽古台になって股間を蹴られるハンドラ。

訓練を終えて、夜の街を歩いていたハンドラとトラキマ。酔っぱらった男たちに、「おお、神殿の女だ。こいつら、娼婦みたいなもんだぜ」と取り囲まれ、抱きつかれる。黙って耐えるトラキマを「いつまでも、男の奴隷でいいの？」と挑発するハンドラ。ついにトラキマも決心、臭い息をふきかけて抱きついてくる男の耳に噛みつき、後頭部に空手チョップ！

これを合図に、ハンドラとトラキマ。男たちの睾丸を蹴り上げる、蹴り上げる。地面に転がって悶絶する男どもを見下ろして、きやつきやつとはしゃぐハンドラとトラキマ。トラキマも「自立」を果たしたということなのでしょうな。

七〇年代、アメリカではウーマンリブの嵐が吹き荒れました。日本でもこれを真似た「中ピ連」などの、今でいうフェミニストの団体が数多く現れました。

お役所にいけば分かりますが、「女性の人権」とか「男女参画社会を築こう」といった類のパラフレットがたくさん置いてあります。私はフェミニストじゃないけれども、有能な女性が能力を発揮できる場は開かれていくべきだと考えています。で、行政にまで一定の影響力を及ぼすようになった以上、フェミニズムの役割はすでに終わったのではないのでしょうか。もちろん、ドメスティック・バイオレンス等、まだまだ女性のために社会全体で取り組むべき課題は残っていますが、七〇年代の女性解放運動の精神を以てこれらの問題解決に当たろうとして、かえって無理を生じていやしないか、というのが、生活者としての私の実感なんです。

というよりも、日本と欧米では、フェミニズムのもつ意味合いがかなり違うんじゃないか。実際、キリスト教（その母体となったユダヤ教）という信仰には、凄まじい男尊女卑の思想が貫かれています。安易な比較は危険ですが、儒教よりも徹底しているのではないのでしょうか。

これに比べれば、日本社会は、建前は先進国であった中国の儒教を取り入れていましたから、表面的には男尊女卑社会でしたけど、実態としては、社会一般における女性の地位は相対的にキリスト教文明圏や儒教文明圏に比べてそう低くなかったと感じられます。

最近、必要があつて読んだゴードン・トマス著『イエスを愛した女』（一九九九年、光文社）は、キリストによつて改悛した娼婦マグダラのマリアにまつわる物語です。

十字架にかけられて死んだイエス・キリストが、三日目に復活したという『聖書』の記事は、それが史実かどうかはともかく、キリスト教にとっては重大な意味を持ちます。そして、この復活を目撃したのが、マグダラのマリアというわけです。

選民意識が強く、他民族に対して不寛容なユダヤ社会のなかで、「左の頬を打たれば、右の頬を差し出せ」と民族を越えた博愛を説いたキリストは、周囲の無理解と権力者たちの危機感によつて処刑される。イエスは、イスカリオテのユダに裏切られただけではなく、ローマの官憲に逮捕された後、十二使徒と呼ばれるペテロなどの弟子も、師のもとから逃げ去られた。

ですから、イエスの復活がなければ、その後、イエスの教えが世界的に広まることはなかったはずなのです。イエスはみずから「神の子」と称しました。それが不遜だということで、ユダヤ人たちから糾弾され、ユダヤ王国を支配していたローマの権力によつて処刑されたわけです。

ここで話が終わっていれば、変わり者が邪悪な教えを広めようとして抹殺された、というだけのことです。しかしながら、処刑された三日目にイエスは墓穴から復活し、天に昇つていった。それをマグダラのマリアが目撃し、世間に広めた。イエスが神の子であつたのは本当だったのか、

と人々は感動し、ここにユダヤ教から枝分かれしたキリスト教が独自の宗教として成立したわけ
です。

ちよつと宗教史の話が長くなりますが、いずれ金蹴りの話に戻りますので、もう少しご辛抱く
ださい。

キリストの復活をマグダラのマリアから聞いた弟子たちは、師イエスの教えを広めようと教団
を結成します。最初は、それまではペテロのような実際にイエスにつき従つた弟子たちが布教す
る形式でした。しかしながら、信徒の数が増え、その住む地域が広範囲になるにつれて、口頭で
の布教だけではすまなくなつた。

そこで、イエスの生涯を文書化した「福音書」がつくられたわけです。直接に生身のイエスを
知っている弟子でなくても、「福音書」を読めばいいわけです。三〜四世紀に、そうした膨
大な数の「福音書」等の記録を整理して、現在の『新約聖書』が作られました。整理された、と
いうことは、当然、そこで切り捨てられた文書もあつたわけです。それらを総称して「外典」と
いうわけですが、欧米の研究者によると、その編纂過程（どの文書を正統とし、どの文書を異端
とするかの選別作業）において焦点となつた大きな問題があつたそうです。初期のキリスト教団
の中心人物はだれか、ということなのです。

現在、初期キリスト教団の最初の指導者は、イエスの弟子ペテロということになっています。すなわち、この漁師出身の弟子が、初代ローマ教皇ということでカウントされているわけです。

ところがこのペテロという男、イエスカ捕まったとき役人に「おまえは、このひと（イエス）の弟子か？」と訪ねられ、「そんな人は知らない」と嘘をついた男です。現行の『新約聖書』を読んでも、師の教えを理解できない無教養で想像力や思考力に欠ける男として記述されています。なんでこんな男が、初期キリスト教団の指導者たり得たのか、キリスト教徒ではない私などには、理解に苦しむところがあります。

実際、「外典」を分析していくと、イエスがいちばん信頼していたのは、娼婦あがりのマグダラのマリアらしいのです。『聖書』を読んでも、男性の弟子たち（そのなかにはイエスを裏切ったイスカリオテのユダもいます）が、イエスのしゃべる言葉を理解できずに途方にくれる場面が多いのに比して、マグダラのマリアをはじめとする女性の弟子たちは、ひたすらイエスを信じて尽くしている印象があります。なによりも、イエスの生涯においてもっとも重要な「復活」の場面を目撃したのは、他ならぬマグダラのマリアなんです。

伝承によれば、マグダラのマリアは「女教皇」と呼ばれていたらしい。すなわち、初期キリスト教団の指導者は、ペテロではなく、マグダラのマリアであつたらしいんですね。

しかしながら、結局のところ、「正典」からは、マリアの存在を重要視した文書は排除されました。なぜか。宗教団体が巨大化し、グローバル化していくにつれ、やはり規制の社会の常識に寄り添わざるを得なくなるからです。

ユダヤ教社会も、当時、地中海世界を覆っていたローマ帝国も、かなり男尊女卑の色彩の強い社会です。イエスの特異さは、そんななかにあつて、娼婦であつたマリアをはじめ、多くの女性たちを差別しなかつたところにあります。性で差別するのではなく、どれだけ神の教えを理解しているかを重要視した。ただし、男尊女卑の思想で貫かれているローマ帝国やユダヤ社会において布教するためには、イエスのそうした面は、ある程度は切り捨てていかななくてはならない。

マグダラのマリアをとくに信仰したのはグノーシスという一派ですが、キリスト教団は徹底的にこれを弾圧したんです。

といったような研究成果が、フェミニズム系のキリスト教研究者によって発表されています。キリスト教にせよ、ユダヤ教にせよ、実際は現在「原理主義」で邪教のように言われているイスラム教などより、はるかに過激で不寛容な宗教です。こういう過激にして徹底された思想と戦うには、やはりこちらも過激にならざるを得ない。

ですから、キリスト教文明圏たる欧米においてウーマンリブ運動が過激かつ盛んになったのは、無理はないという気がします。それだけ「男尊女卑」を当然とするキリスト教文明の存在は強大だった。ジャンヌ・ダルクは、男装しただけで宗教裁判にかけられて火あぶりの刑となつたのです。

から。

目覚めた西洋の女たちが、ここまで確固として聳えたつキリスト教文明の「男尊女卑」思想を崩壊させるには、非常手段もやむをえないでしょう。彼女たちにとって、敵はキリスト教文明という「過激な男性性をもった思想」なんです。これに対抗するには、「男性性を象徴する肉体の器官」を攻撃するしかない。イスラム過激派がニューヨークのシンボルであった貿易センタービルに自爆テロを敢行したように。

だから、ハンドラはトラキマに、自立のための手段として股間蹴りを教えた、というわけです。

やがて、ハンドラは劇中で穏やかな好青年と恋に陥り、子どもを産みます。ハンドラの存在をけむたがった都市の有力者たちは、その赤ん坊を誘拐し、ハンドラを脅迫する。子どものために、神殿で男たちに奉仕する巫女となる決意を固めたハンドラ。

そこに、いまやすっかり目覚めた女であるトラキマが殴り込みます。門番に金蹴りを浴びせて強行突破。赤ん坊を無事保護し、男たちの慰みものになるうとしているハンドラに、剣を投げ与える。あとは大量虐殺。ハンドラは、神殿に集まった有力者たちを皆殺しにし（このなかに金蹴りシーン一回あり）、旅立っていく。

で、ナレーションが入ります。「この後もハンドラは、男たちに抑圧された女たちのために、戦いつづけたのであった」

とまあ、たかがB級映画の解釈に、壮大なキリスト教文明史を援用したわけですが、実際のところ、西洋の女性はそのままで過激にならなければいけないような、哀れな存在だったんですね？ 多くの女性って、そういう文明の建前とは離れた場所で、もっとしたたかなんじゃないでしょうか。

実際、『ハンドラ』を製作したのは男性です。建前上であつても、女性を差別し、見下してきたことへの贖罪……いやいや、そうした男性である自分たちの急所を攻撃され、もろくも崩されることへのマゾヒスティックな快樂が、表面上はフェミニズムを装う『ハンドラ』には見え隠れしているような気がします。